



SHINRAN  
750th

# 御遠忌通信

「いただこう あわせる 掌のぬくもりを」

第6号



あかり とも

発行日 2018年10月1日  
責任者 宮尾 隆造  
編集 御遠忌実行委員会  
連絡先 長浜教務所

〒526-0059  
長浜市元浜町32番4号

TEL 0749-62-0737  
FAX 0749-62-0754

## 巻頭言

お孫さんに、「じいちゃんが死んだら、やじにしているの？」と問われたら、どう答えますか。

「お浄土で待っているよ」と答えられる人が、どれだけおられるでしょうか。

真宗門徒であれば、浄土の事は知識の上では、大抵の人が知っています。この身は、いずれ浄土に参らせてもらえると思えば深く念仏申していないと、「お浄土で待っているよ」とは答えられませんか。

曰く、「私たちは自分が迷っているつもりなどなく、自分の事は、自分で何もかもわかっているつもりですが、よく考えてみますと、自分自身明日さえも何もわからないが本当の姿です。「お浄土で待っているよ」と明日への確かな生きる道しるべに向けて毎日が歩めることが、充実した念仏者の証です。

「浄土で会える」このことは、すなわち死は命の消滅ではなく、浄土という受け止めていただける世界があるからです。

仏の世界は、因果の道理で動いております。「因果の道理」とは、三世十方変わらぬものは、原因なしに起きる結果は絶対になし、結果には、必ず原因があるということです。夫婦、親子、同じ家族でも、やってきたことが同じことはありません。することも話すことも、思うことにいたっては、みんなバラバラです。

因果の道理からも、行先はみんな別々な所に行くこととなりますが、それがどうしてみんな浄土で会えることになるのでしょうか。それは共に、南無阿彌陀仏をいだけさせてもらえるからです。因が同じ浄土の因であり、果も同じ浄土に往生できます。

ともにお浄土で会えるのが、お念仏の教えに出会ったもの同士の大きなご利益です。このことが、老・病・死ときちんと向き合える唯一の道でもあります。

## 最後に頼りとなるもの

現役時代にはたくさんの人とかかわり、一緒に仕事をやってきましたが、定年と共に多くの人が私の周りから離れていき、だんだんと交友の機会も少なくなり、これからはますます少なくなり、最後は家族だけとなり、死んでいくときは家族もついてくれませんが、まったく一人だけになります。家族も健康も財産もみんな大切ですが、最後までついてくれる宝ではありません。いつかは離れていき、その時は絶望のみが残ります。これらは畢竟依（究極のよりどころ）ではありません。最後に頼りになるのは、阿彌陀様だけです。

かつて、私の友人のお子さんが小児がんになり、毎日欠かさず病院に出かけることが日課となりました。入院当初は、元気にしていましたので「がんばれよ、必ず治るから」「早く元気になって、お家に帰ろう」と元気つけていましたが、日に日に病状は悪化して、別人のようにやつれていく頃になると、とても「がんばれよ」は言えなくなり、強く手を握ってあげることしかできませんでした、と話してくれました。

「お父さんがここにいますよ」は、阿彌陀様が呼びかけられておられるように感じました。阿彌陀様お一人だけが、手を差し伸べて、「我が名をとえよ、私がいつもそばにいますよ」と呼びかけてくださいます。

阿彌陀様の呼びかけの声によって、念仏をとええる身となり、悲しい時やつらい時やさみしい時、あるいは腹が立つときなどは、阿彌陀様の前に座ると、みな何かしら心が安らぎます。

七百五十回御遠忌を縁に、五村別院・長浜別院で皆様方のお越しをお待ちいたしております。



長浜教区第二十組

法話と落語にちよる「聞法の場づくり」

日頃から、真宗の教えを門徒の方にわかりやすく伝える方法はないかと二十組の役員会で話し合っておりました。そんな中、各地の御寺院で「落語と法話」のコラボレーションをされていることを広報誌で目にしました。落語は歴史的には唱導文学に端を発し「やっちく二人会」は僧侶と門徒さんとの共同企画であると聞き、魅力を感じ、是非お願いしたいと申し込み、ご採用いただきました。

竹原・八木の二人で  
「やっちく二人会」真宗落語×法話

期日 二〇一九年四月六日（土）

会場 大通寺 大広間

参加費 五百円

不思議な御縁で結ばれた出身も年齢も全く異なる二人。  
南立亭千笑（なんたつていせんしゅう）氏こと八木千春氏と竹原了珠氏による真宗落語と法話の融合が、新しい可能性に挑戦します。

皆さん、是非、ご参加ください。



プロフィール

「僧侶だけが教化を担うのではもったいない」意気投合した門徒（推進員）と僧侶が素人落語と未熟な法話の二人三脚を始めました。私たちの願いはただ一つ。僧侶と門徒の協働スタイルがお寺の新しい可能性を生むはず。その提案を事業としてさせていただきます。

◎南立亭千笑氏は、真宗の僧侶ではありません。名古屋市在住の熱心な真宗門徒の一人です。また、熱心な落語ファンの一人です。

◎竹原了珠氏は、石川県七尾市出身の僧侶です。また、真宗大谷派東本願寺や同朋会館に五年間常勤補導として勤務の後、名古屋教務所にて教区駐在教導として奉職されました。

現在は自坊で活躍中です。

問い合わせ

主催代表 西照寺

電話番号 〇七四九（七二）二二七五

「御遠忌 ごきげん ワークショップ」は御遠忌の趣旨に賛同の上、様々な活動を企画し実施いただく団体を募集しました。応募団体の中から選考の上、一定の助成をするもので、助成対象となる事業は御遠忌の願い「生きる力を伝える」に則した多様な活動を行っていきます。

「御遠忌 ごきげん ワークショップ」を契機として、真宗門徒の皆さんはもとより、宗派を越えて地域の方々との交流を深めてまいります。



1251年（79歳）

親鸞、書状により常陸の「有念無念」の論争を制止。

1252年（80歳）

親鸞、書状により関東の「造悪無碍」の風儀を制止。

## 御遠忌 二度の不思議な出会い

第20組 円光寺住職 堀 匠

私が初めて宗祖御遠忌に出会わせていただいたのは、ちょうど四、五歳の時に行われた本山の七百年御遠忌の時なので、楽しそうな写真は残っているのですが、残念ながら記憶にありません。覚えているのが自坊での時です。もう半世紀以上も前なので、おぼろげな記憶しかありませんが、不思議なことに、ある場面ごとに鮮明に覚えているところがあります。その一つは、お寺の階段のところに広くて長い坂が作られ、門徒の方がそこを行き来して、お参りされたことです。



本山御遠忌に上山する

今まで見たこともない大きな木製の坂が珍しく、何度か上り下りして遊んだことを覚えています。もう一つは、お練りの時に、小さいながら七条袈裟を初めて着せられ、その絵柄に所々小さいきらきら光る糸が使われ、それが本物の金が使われていると自慢げに話してくれた祖母の声が今でも耳の奥に残っています。親鸞聖人の御遠忌で、仏様に出会えた感謝の気持ちが表せばいいのですが、実は、お練りの最中に食べたまんじゅうの味が一番の思い出です。お練りを待つ間、退屈でいざ出立の時に、出されたまんじゅうを一つもって列に並び、食べながら歩いたときの味が、半世紀たった今でもはっきり覚えています。

二度めの出会いは、およそ二十年前に出会わせていただいた、五村別院での蓮如上人五百回忌の御遠忌です。その頃青少年のメンバーで、自分の具体的な仕事は忘れてしまったのですが、茶所で待っている間に、聞こえてくる大無量寿経のお経の速さにびっくりしたことを覚えています。その場所は本堂より距離があり門の近くの場所なのですが、そのお経の音が大きくて境内全体に響き渡るほどでした。二つの音木を使い、今まで聞いたこともない速さで、一糸乱れぬそのお経は、まさに五十年に一度しか出会えない尊いものだと感激しました。

実はその時、本山から御門首が来られていました。五村別院は、一六〇三〜〇四（慶長八〜九）年、教如上人による東本願寺両堂

創建によって五村の坊舎は「五村懸所」「元の本山」と称されてきました。本山の方の話では、五村別院は、由緒があり、本山に近いお寺なので御門首もわざわざ来られたと伺いました。その日は本山から付き人の方が数多く来られ、さながら五村別院が本山になった記念すべき日であったとお聞きし、驚きとともに歴史的に貴重な法要に出会わせていただいたことに不思議な御縁を感じ感謝したことをはっきり覚えております。

来年行われる長浜別院と五村別院の御遠忌には、どんな御縁に出会えるか楽しみにお参りさせていただこうと思います。

## 御遠忌にお会いできる喜び

第20組 西照寺住職 玉樹 惇

古希を既に過ぎた今、両別院の宗祖親鸞聖人七百五十回の御遠忌法要に遇わせていただけますことは、ひとえに仏祖のお導きのお蔭と、まことに有難く存じあげております。

今ここで拙寺にて勤まりました宗祖聖人七百回御遠忌法要のことを、半世紀近く経ちまして、思い起こしております。

法要は昭和四十八年十一月二十三日から二十五日にかけて勤修されました、二十三日の午前中は本堂の改築落慶法要が勤まりま



した。それまで本堂は葺葺屋根でしたが、昭和四十三年十一月に改築決議後、すぐ喜びの余り深夜に先住は当時の総代様の膝にもたれかかるようにして還浄しました。門徒の皆さんは先住の遺思を汲んでいただき、基礎の補強工事等がなされて、輪奐の美なりし瓦葺き本堂の改築落慶法要が勤修されました。門徒さんと有縁の方々の懇念懇志のお蔭で、竣工なった新しい本堂において、宗祖聖人七百回御遠忌法要を迎えることができ、まさに一同が感涙慶喜いたしました。

式支配を中心とした勤式と荘厳に関する連日の住職や門徒役員との打合せ、門徒さんへの説明、仏花に造詣の深い門徒さんによる連日の立花の準備、それはもうあらゆる種類の準備に余念がある

1252年（80歳）

親鸞、『浄土文聚鈔』を撰述す。

1254年（82歳）

親鸞、『唯信鈔』を書写。

りませんでした。長年に亘って皆さんが数々の準備と苦労を重ねてきてくださったことを有難く思いました。

落慶法要の登高座※・「七宝講堂道場樹」の和讃を誦誦と、さらには御遠忌の登高座・「如来大悲の恩徳は」の和讃を誦誦の折には、雅楽が余韻嫋嫋と奏でられるもと、感極まりないものを覚えました。

また、小学生を中心とした企画についても、早くから何回もの稽古をして発表することができました。一日目の初夜は宗祖の御生涯を部分構成して、子どもたちに劇を演じてもらいました。特に印象的なのは弁円済度の段でありました。山伏弁円は、常陸の人々が山伏修行の自分から離れて、念仏の教えを聞こうと稲田の草庵の宗祖の所へ多く集まることを快く思わず、「おーい、親鸞出て来い」と稲田の草庵を訪ねて、宗祖の命を狙おうとしたところ、宗祖の穏やかなご尊影を拝して、「なぜ、人を殺すようなことを私は考えたのでしょうか」と後悔の涙をこぼしたのですが、その場面を小学生に演じてもらいました。特に、弁円がたちどころに弓箭を折り、刀や杖を捨てて、頭巾を取りはずし、柿の衣をあらためた上で、念仏の教えに帰した場面はまさに感激でした。

小学生を中心とした企画のもう一つは、水前寺清子さん歌唱の「しんらん音頭」であり、この踊りは夏休みの頃から境内で練習を始めました。軽快なリズムとメロディに乗り、「しんらんさーまーは」とか「弁円さーへも」とか、一生懸命に楽しく輪になって踊ってくれた子どもたちの姿を見た時、目頭が熱くなりました。

さて、先に述べました拙寺改築落慶法要・宗祖聖人七百回御遠忌法要から早くも四十五年という歳月が経った今、教区・両別院での宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要をお迎えさせていただくについて、あらゆる方々のご苦労の上に勤修されることを幾重にも思う次第です。宗祖聖人の本願念仏の御教えのもと、是非とも「いただこうもりを」というスローガンの心で法喜申しあげ、御遠忌をお待ち受けさせていただきたいと存じております。



しんらん音頭

### 御遠忌実行委員会からのお知らせ

「子ども御遠忌」テーマ及び趣旨文が決定しました

☆テーマ「しんらんさまのおくりもの」

☆趣旨文

親鸞さまってどんな人？

御遠忌ってなに？

「しんらんさまのおくりもの」は、親鸞聖人の時代から七百五十年にわたって、親から子へと受け継がれてきた「念仏し掌を合わす」とであります。親鸞聖人もまた、お念仏のある生活を大切にされてきた方です。その親鸞聖人は、現代に生きる私たちに何を願い、何に気づけと言われているのでしょうか？

毎年開催される「花まつり子ども大会（長浜別院）」・「子ども報恩講（五村別院）」では、生活を見直すついでとして、みんなで遊び共に学んできました。この度の子とも御遠忌は、五十年に一度の親鸞聖人のご法事であり、私の人生を見直すついでであります。「しんらんさまのおくりもの」を共に受け取り、共に遊び、お参りをして教えのある生活を歩んでいきたいと思えます。

子どもたちと御遠忌をお迎えするということは、私に先人が伝えてくださったこと、又、私のこれから伝えていくことを今、明らかにすることです。そのことを今回、「しんらんさまのおくりもの」という言葉で表しました。

この御遠忌は私たちにとって一生に一度のことであり、またとないご縁です。子ども御遠忌では子どもたちと共に「人生を見直す」として、お勤めしていきます。

開催日は二〇一九年五月三日（金）です。皆様の御参加をお待ちしています。また、有縁の方々にお広めいただきますよう、お願い申し上げます。事業部子どもイベント班 スタッフ一同



教区御遠忌期間中の五月十九日（日）に行われる

帰敬式及び稚児の募集を十月二十二日より開始いたします。

詳細につきましては、お手次ぎのお寺までお尋ねください。